



國道八號線 (五)

金森誠之

前號までの梗概

活動寫眞のロケーションが上野原の高臺でやつて居た日、工事場で奈良技師が、その許婚が若い男とドライブに來たのに
出會し不快となつたが、主役である上野原出身の美しい朗かな女優細田美智子が親しく話しかけるのに慰められた。

數日の後、奈良の母親が上野原まで來て、許婚との結婚を勧めたが、斷つて二人は活動寫眞館へ小供に誘はれて這入る。
上映中の映畫は、美智子の物語りを美智子が主演してゐるのである、奈良は美智子から自分へ話しかけて居る様な氣持ち
で見ている。

ガソリン會社の重役で荒尾技師の許婚の父は、荒尾の部屋から、島田村を通る圖面をぬすんで、上野原の借家を這ひ立て
、島田村へ建て變へようと企てた其の内のガソリンスタンドの娘美智子の美貌に野心を起したが、手厳しくはねつけられ
た。其の腹いせに色々美智子はいぢめられ、病父の寢てゐる家まで潰されようとしたが、荒尾技師に助けられた。美智子
は父の病氣平癒と、國道上野原通過とを諏訪神社に毎夜詣りに行つて居つたが、ある日怪しげな男につけられて、廻り道
をして歸らうとしたが思ひもよらぬ崖に落ちた。崖から這ひ上つて、漸く國道に出た時、又もや、痴漢に襲はれ、全く人通
り
のない夜更けた國道に、どうすることも出来なかつた。

とあるカツフェー

部屋の圍りはソファで取り巻いて、中央に五坪餘りの廣場があり、其處でダンスが出来る様になつてゐる。電燈の淡青く光つてゐる下には、如何にもエキゾーティツの様子をした女給共は、客と膝を並べて、何が可笑しいかキャツキアと笑つてゐる。上野原から出て來た荒尾には如何にも物珍しい風景である。

「随分すごい所だね」

夕方の汽車で現場に歸らうとしたのを、友達達は近頃の銀座の空氣を吸つて行けと云ふので、勧めらるゝ儘に銀座裏で夕食をすまし新宿までの圓タクを拾ふつもりで街を歩いて居るのだ、又此の家に引きづり込まれたのである。

隅の方に女連れのお客が二人で、囁々と私語してゐたのが、蓄音機が、ブルースを初めたのを聞きつけると直ちに立つて踊り初めた。それに連れられて、女給を相手にしての二組が立つた。

テンポの遅い踊をどの組も、みだらげに踊つてゐる。荒尾には、多少酔つて氣分が荒んでゐても、こうした空氣を見るのが不快でたまらなかつた。

僕は歸るよ、汽車がなくなつてしまふから

荒尾が立たうとするのを、友達達が手を押へて引きとめながら、

「話の種だ、東京にもこうした所もあるのを見て置き給へ」

今に面白くも来るよ

皆んなが、面白さうに踊つて居たのが、ベルが鳴り初めると急に止めて自分のテーブルへ歸つて行つた。

「下から誰か上つて來たんです、警察の人の用心に、誰か這入つて來るとベルを合圖に止める事になつてゐるんです」と女給は荒尾に説明をした。

「ドヤ」と足音がすると、稍年をとつた外人の二人連れの様子が上つて來た。それに續いて若い外人と腕を組んだ、シツクな洋装の日本娘の顔が表れた。其の顔を見た刹那、荒尾は危く驚きの聲を立てようとした位であつた。

今日訪問する事を知らせて置いたのに、留守になつて居た許婚の芳子でないか。

芳子は荒尾を見つけると、シャー／＼と平氣な顔をして近いて來た。

今日家へいらつしやつた？

荒尾は如何にも不快で、唯首肯くばかりで、返事をする氣にもならなかつた。

留守をして、御免なさいね。今日バ、に代つて接待よ

と云ひながら、連れの外人を願て、

「この方等は、うちの會社の本社の人達」

と紹介して外人達には唯簡單に

「シスター、アラオ」

と紹介した丈で、挨拶がすむと、笑ひながら、其の一卷と座を占めた。

君、隅へ置けないね、あんなのと知り合ひじゃ

友達は、この様を見て、寧ろアツケに取られて、漸くこう、野次つた丈で言葉が續かなかつた。

敗けたよ、一體どうして知つてゐるんだい？

如何にも荒尾としては不似合の、モダンガールを知つて居るのは不思議でならなかつた。

親の代理に、接待して居ると云へば、一通り理屈が通つて居るし、尙あれ迄自分の前で平氣で居られるからには、やましい點は少しもないであらうと、荒尾は力めて、平靜に心を落ちつけ様としてゐるのであるが、自分を捨て置いて、眼の前で外人と、ハシヤいで居るのは、どうしても不快でたまらなかつた。友達にも「自分の許婚である」と云ふのが恥しい氣持ちがせられて、唯苦笑してゐる丈であつた。

さあ飲もう！

荒尾も、氣持ちの苦しきから、ウキスキーの杯を重ねた。そうして、時は知らぬ間にたつて行く、芳子が外人と立つて踊り初めた頃、荒尾もすつかり酔が廻つて、温順しい女給に、

しつかり遊ばせよ

と、肩を抱へられて居た。

二三

どんなに酔つても荒尾は自分の仕事を忘れなかつた。今日東京の役所で打合せを済ませて、愈々明日は路線の決定すべき日である事になつて居るため友達はどうなに勸めても東京には泊らなかつた。

汽車がなかつたので、八王寺迄電車で行き、上野原から自動車を呼んで、夜更けた大垂水の阪を走らせたのであつた。あゝした女が自分の妻となるべきであらうか？ 許婚を解消してしまふか、などと芳子を忘れようと力める一方、如何にも利々しい容姿や、外人を相手に、流暢な英語で應待してゐる態度など、自分の職業に必要な得點だと打ち消しても思ひきつてしまふ事が出来なかつた。夫れと共に、あれからどうなつたらう、あの若い外人とは如何にも親しそうであつたが、普通のお客としての應待であらうか、などと考へると不快で不快でたまらなかつた。

與瀬を過ぎて、境川を渡り、上野原の坂に掛つた時は、酔もすつかりさめて、何だか物足らない氣持ちで、友達でも居て、自分の不満を思ひきり話して慰めて貰つたならば、などと考へつゝ、大曲りの急カーヴを、廻つた其の時であつた。

ヘッドライトに寫し出された、二人の男女の影。

此の夜更けに、上になり下になり格闘である。

杉村急げ!!



美智子さんじゃありませんか!!

痴漢に襲れて居たのが、美智子であるのを知つた時、自分が丁度此處へ來合はせたのは、何だか深い意味がある様に感ぜられて、今夕の東京での不快の想がすっかり吹き飛んでしまつて、爽しい氣持ちにさえなつた。

荒尾は、思はず呼んだ、運轉手も、この様を見つけると思いきりアクセルを踏んで急スピードを出した。

自動車のヘッドライトに照らされたと見るや男は推えつけて居た女を急いで離し、飛び上りさまにげ出さうとする。女は此度は反對に、男を離すまいとする。

然し自動車に着いたときは、男は女をつき倒して、林の中へにげ込んでしまつた。

まあ、荒尾さん!!

もうどうなつてしまふのか判らぬ迄の窮地から、思いがけなく走つて來た自動車のヘッドライト、に大きな味方を得て何が何だか判らずに、悪漢を離すまいとして、突き倒され、起き上つて見ると、其處に荒尾が立つてゐたのである。

どうしても現實とは考へられない、いろいろの事件に、頭がぼんやりしてゐる所へ、この大衝動である丈けに、美智子は何んにも口をきけなかつた。

二人は、ボンヤリ「野郎!!」とばかり悪漢を追いかけて行つた運轉手の後を暫く眺めて居た。漸く自分に歸つた美智子は

荒尾さん有難う御座いました

と云ふなり、荒尾の胸に顔をうづめて、泣き出した。

どうしたんです?

美智子が身仕舞を直しながら、神様へ參詣してからの物語りをつづけた、怪しい男の立つて居た事、其れをのがれる爲め思はぬ谷に落ちた事、漸く國道に出ると怪漢に襲れた事、など、思い出しては身振ひをして細々と話した。

そんな所に谷なんかある筈がないがなあ!

怪漢に襲はれた事件が大きいであらうがもう無事にすんでしまつた後であるから、荒尾としては、トンネルを通そうとする、山の上に、不思議な谷のある事は、聞きのがす事が出来なかつた。

妾も前から、話には薄々聞いて居ましたが、毎年毎年少しづつ下るんだぞうです

明日路線を確定しなければならぬ。其の路線の上に、こんなものがあらうとは夢にも思はなかつた。

斷層かも知れない、そんな下へトンネルを通しては大變である。若しこれを知らずに、工事を完成してしまつたならば技術者として、全く面目を失ふ所であつた。

遅くなつてすみませんが其處へ案内してくれませんか

「えー」と返事をして美智子が歩き出さうとした時今迄忘れて居た、足の痛が猛烈であるのに氣がついた。

苦しさに堪えて、顔色さえ變へぬ様努力して一足前へ踏み出したが、ヨロ／＼とよるめいて、道端へ倒れてしまつた。

妾足がどうかなくなつたんですの——

痛さを忍んで、笑顔さえ見せて、荒尾に訴える。

ではおんぶしてあげましょう

荒尾は顔付から、大した事でもないだらうと考へて、是非、早く見たさに、美智子を負つて、林をわけて、斷層の所へ進んで行つた。

夜更けて、若い娘が、若い男の背に、而かも、林の中を分けて行くのである。美智子の温か味が、荒尾の温か味が夫々各々に通じたとき、美智子がしつかり荒尾の肩につかまつた。荒尾が強く、美智子の腰を推えた。

此處ですの

美智子を下して、横倒しになつた木に上つて見ると暗くてよくは判らないが、深さ三米もあるか、幅五米から十米位、帯状になつてずつと落ち込んでゐるのが見える。

この下にはトンネルを通せない

荒尾が、小聲で獨言を云ふのを美智子が聞きつけて、

トンネルが出来ないと國道が、上野原を通りますの？

と荒尾の顔を見上げる。

まあぞうなりますねえ

美智子は雀躍せんばかりに喜んだ、がばと座つて諏訪神社の方に手を合せて、

神様——すみませんでした。お恨み申して、矢つ張り、お助け下さいましたのですわねえ有り難う、御座いました。

と心に念じ、何だか此の上にも大きな幸が来る様な氣持ちがせられて来る。荒尾も其の可憐な姿を見つめて其の肩に手をかけようとした時、暗をついて大きな聲、

荒尾さん——何處へ行つた——

運轉手が歸つて来て、荒尾も娘も居ないのに驚いて呼んで居るのであらう、斷層の話にすっかり運轉手の事さえ忘れる位夢中になつて居た。

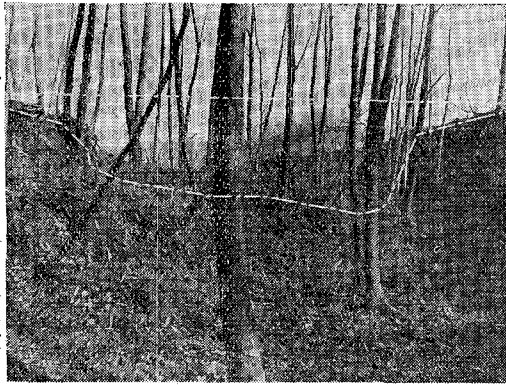
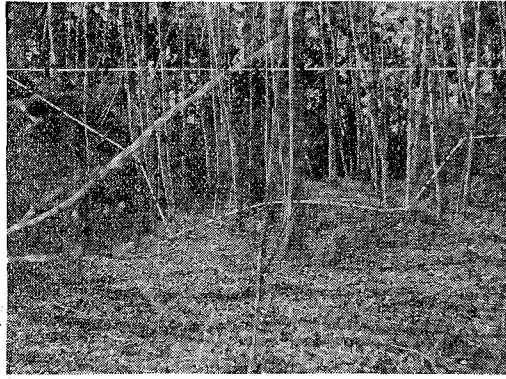
此處だよ——待つて居ろ！

再び美智子は「すみません」と云ひながら荒尾の背につかまつた。

二三

其の翌日は、上野原の運命を決する。島田村を通過する事を確定される日で、何處からもれるともなく、町の人の耳に

傳はつて、暗い雲に全町が包まれた様に、しめり返つて居たのであつたが、どうした譯か島田村の測量を完成して解散された測量隊が再び集められて、國道とは思ひも寄らぬ、諏訪神社の裏山へ進んで行くのを町の人が不思議がつて眺めて居た。



測量隊に、快くは思つて居ない町の人
人は矢張り白い眼で一行を見て居る。
唯其の後姿を拜まんばかりに、感激し
て居るのは美智子丈けであつたが、荒
尾から口留されて居る丈けに、父にも
弟にも話さず唯獨り、神に感謝してゐ
る。其れに今日からは胸に秘めたある
喜びに、弟からさえ不審がられる位で
あつた。

姉さん、神様なんかには詣つたつて利き目がないじやないか

自動車のパンク事件に、姉に全く頭上りのなかつた弟は姉弟の親しさに、満願を過ぎた今日、依然として、島田村通過のみか、何だか妙な所の測量が初まつた、と云ふ話に姉を野次つて見る氣になつたのであつた。

利き目があつたらどうする？ 上野原を若し通つたらどうする？

正次は姉の眞顔になつたのを稍不審に思つたが、

姉さんのいゝ様に僕はどんな事でもしてあげらあ

ぢや、約束しますよ、と上野原の人々の暗い氣持ちに引き比べて、姉弟は、いとも朗かである。

美智子には今迄は全く諦めて居た荒尾が、昨夜の事件から、どうしても諦められぬ人となつた。若し弟が神様でもあつて、この約束が實行できるならば、などと、一寸したこんな冗談口にさえ誠しやかに考へられるのであつた。

測量隊は、幾時間も経たずに、美智子の家の前を過ぎて行つた。町の人にはどうして、あんなに早くすんだのかと不審であつたが、美智子には、もうすつかり上野原通過に確定した様な氣持ちがせられた。

「荒尾さんが来たよ」

と云ふ弟の聲に、弟にも恥しい位、そわ／＼してゐると荒尾は美智子の家に這入つて來た。

昨夜の話は、弟にも何も話して居なかつたが、唯足を痛めた丈で、それも、脱臼したのであつて、直ぐ醫者の手で、少し痛い目を見た位ですつかり直つて、今になつて見れば荒尾に負ぶさつたのさえ恥しい位であつた。多分見舞に來てくれたのであらう。

如何です、足は？

美智子にはどうしたのか、耳まで赤くなつた。

え、脱臼した丈けでもうすつかりいんすの

荒尾は安心して、昨夜あの夜更けの山の中で、美智子が、神様を念じて居たあの姿に對しても早速知らせてやりたい氣持ちになつたのであう。

國道は島田村を通れませんよ！

荒尾が、上野原町民に知らすこの事の第一聲であつた。測量の結果は、斷層ともつかぬ一種の地すべりが、諏訪山にあつて、鐵道のトンネルは幸にも、其の終端から外れてゐる。若しトンネルを作らうとすれば、鐵道と交叉して其のトンネルの上を越さなければならぬ、そうするには大きな盛土を島田村を貫通して作り、工費は、上野原を通過せしめる倍額以上もかゝり、其の上適當の勾配を保たしめる爲めには距離も延長して、上野原町を殺し、島田村も大盛土で殺し、莫大な工費を費すのは何の意味もない事になる。

上野原を通過して、距離を短縮し得べき路線を選ばなければ

荒尾は堅く決心した。そうしてそれが、美智子を通じて神様が自分に教へてくれた様にも感ぜられる。

まあ嬉しい——國道が上野原を——

美智子も正次も飛び上つて喜んだ。

隣室で聞きつけた父親も、病も忘れて出て來た。

「まあお父様、お起きなすつては身體にさわりますよ」と美智子は父親をいたわりながら靜かに坐らせる。

いや、ワシの病氣も治る、こんな目出度い事じゃ

「早く細田さんに知らせなくつちや」

美智子の飛び出して行くのを、荒尾は嬉しそうに眺めて居た、あの斷層を見付けて自分に教へてくれたのは美智子である。路線の決定には一番の功勞者である。

「若し、あれを知らずにトンネルを作つて居たとすれば」

荒尾は思ひ出してもゾツとするのであつた。

「すべて美智子の功績にしてやらなくつちや」

荒尾は堅く決心したのであつた。

x x x x x

館内の人々は、緊張して見てゐる、それに、自分の町に恵まれた幸運をまさしくと見るのであるから、其の當時の事を思い出して今更その喜びを新にしてゐる。

奈良は母親にそつと耳打ちをした。

「あの荒尾と云ふのは私をモデルらしいんですよ。」

「そうするとあの話はほんとかい？」

奈良は、何だかギクツとして、耳が熱くなる様に覺えた。

「後でお話します」

話をするると他の人の邪魔になりそうなので、話はそれきりとなつた。

「僕あんなバンクなんか、さゝなかつたよ」

小供は色々の事が自分らしいので、自分ときめて熱心に見て居たらしい、奈良達の話に、自分に歸つたのか、思はず大きな聲を出した。

「シツ！ シツ！」

と云ふ聲が聞えたので、だまつてしまつた。

映畫は進んで行く。